

公益信託世田谷まちづくりファンド

第24回助成事業 審査講評

まちづくり活動部門

【2回目応募グループ】

< 3-1 かいっちゃんち 紅茶クラブ >

- ・地域共生の家であった場を、紅茶クラブとして子どもたちの居場所、大人の交流場に活用され、地域に住む者が読み聞かせ、七夕まつりなど、楽しみにしている方々がいらっしゃるでしょう。ご苦勞でしょうが、体調管理にご留意され、活動メンバーとともに、できる範囲で地道な活動を継続されることに期待しています。
- ・まずは、活動を再開していただきありがとうございます。小さな活動でも、それを必要とする人は必ずいます。気負わず緩やかな雰囲気の間づくりを、ぜひ心がけてください。
- ・小中学生の放課後の居場所の確保は大切で、行政ではなく、地域住民による活動は意義がある。特に、サッカーなどの遊び以外に、読み聞かせやフルート演奏の鑑賞、塾に通えない子たちへの学習支援等と学童クラブに劣らない活動は、今後も地域の親の期待の高まりが期待できる。
- ・取組み自体は素晴らしいと思うが、参加者が求めていることをやっているのか、主催者がやりたいことをやっているのか、よくわからないと感じた。ニーズがどこにあるか、もう一度考えてから取組むべきではないか。「やりたい」は大切にしながら、独善的でない取組みを進めるバランス感覚が、こうしたまちづくり活動の担い手には求められると感じる。ぜひその点を熟考頂きたい。

< 3 - 2 Morning Project Samurai -Setagaya Division->

- ・個人的にイルミネーションが好きなので、ぜひ見に行きたいと思います。多くの人に安全に楽しんでもらえるように、広報活動にも工夫してください。
- ・昨年度の実績も着実に積み上げており、良い取組みに繋がっていると感じた。だが、率直に言って世田谷のまちづくりにどう繋がるのか、さっぱり理解ができなかった。若い世代がこうした取組みに世田谷区内でチャレンジしてくれることは大歓迎だが、単に世田谷区内の公共施設で若者が集って勉強会をしているだけのようにも思える。まちづくりファンドの他の助成先とのコラボレーションなど、積極的に考えて頂くなど、何らか世田谷のまちづくりに繋がる明確な考えをお聞かせ頂きたいと感じた。

< 3 - 3 Setagaya Community Design Project >

- ・活動の認知度が上がったことはとてもよかったですと思います。今回の申請では、機材・備品や外注費などを中心に説明がありましたが、10年間継続するのならば毎年多額の外注費がかかる企画が必然なのか検証してもよいではありませんか。光のアート以外の可能性にもぜひチャレンジしてほしいです。また、継続的に学生が関わる仕組みも様々なメディアを活用するなどして工夫できるとよいと思います。
- ・世田谷の貴重なみどりの資源のひとつである都市農地を、区民が身近に感じることができる新しい切り口の活動だと思います。10年継続されるということで、大学と農家の連携、アートという手法によるアプローチの有効性など、この活動を通して得られる様々な知見を、是非広く発信し、区内はもちろんのこと、できるだけ多くの人に届ける活動にしていただけたらと思いました。参加できなかった人に次の年に参加したい、活動を支援したいと思ってもらえるような動画の制作、パブリシティの展開なども期待します。将来的には、区内の他の農地にもこのムーブメントが派生すると素晴らしいですね。
- ・ぜひ企業協賛を集める努力をして頂きたい。助成2年目にあたるが、助成金が使えなくなった先、自分たちが卒業した後について、本気で考える時間を設けて欲しい。助成先としては適切と考えるが、展望

がないままイベント的な活動を行うのでは、地域住民や地域企業の理解や共感、積極的な協力者を開拓しにくい状況が続いてしまうと思う。貴重な活動ではあるとおもうため、この活動から得られた芽生えをどのように育てていくつもりか、次年度はぜひ考えを聞かせて頂きたい。

- ・冬のライトアップは地域に根付いたイベントに育ちつつあるようで嬉しいです。今年は会場のバリアフリー化も進めているということで、車イス利用者としてうれしいです。来年の2月はぜひ見に行きたいと思います。今後ファンドの助成が無くなってからの運営費をどうするか考えてください。

＜ 3 - 4 【地域でいろんな世代が集う場づくりプロジェクト】

いいおかさんちであ・そ・ぼ＞

- ・空き部屋を使った、多世代交流は大変有意義だと思いながらプレゼンをききました。地域コミュニティが希薄となっており、地道な取組みを継続し、地域への発信に努め、また他の団体との交流・連携で活動を広めていただきたい。
- ・今年も続けられることになってよかったです。助成は長くて来年までですから、その後どのように続けていくか、あるいは形を変えていくか。今年は、これまでの想いを広げていく方法を検討できると良いですね。
- ・地域の空き家を活用して、料理や音楽会などの多様なイベントを企画・運営し、多世代の交流の場となる活動は意義深い。多世代が生き甲斐を感じるような「子供のゆるやかな見守り」を通して、子供の居場所づくりや安心な街づくりに貢献している活動は評価できる。
- ・地に足のついた、非常に良い活動だと思う。とても良い活動だからこそ、長く続けて頂きたい。場所の提供をしてくださっていた方の不慮の状況など、不安要因はあるが、だからこそ、培ってきた地域の繋がりが仲間からの信頼関係を大切に、無理なく、長く、まちづくりに繋がる柔らかく優しい場づくりを継続して頂きたい。

< 3-5 みどりの会 >

- ・日本文化が見直される風潮があるので、気軽に楽しめるお茶会や和をテーマにした活動で、多くの人に関心を持ってもらえるといいですね。講師の方々も含め活動を通じて生まれるコミュニティが継続できるように工夫してください。
- ・町に開かれたとても良い活動だと思う。細く長く続けて頂きたい。ただサークル的なニュアンスの強いイベントも中には散見される。発表を伺うと、まちやコミュニティに対するそれなりの理由や思いが伝わるが、申請書上では十分くみしきれない部分もあった。伝え方の工夫をするなどして、共感者を一層開拓して頂きたい。
- ・昨年度の活動に引き続き、決して多いとは言えない助成金をやりくりしつつ、イベントの種類を増やしたり、内容を充実させたりするなど、様々な工夫を行おうとしているのがよく理解できました。特に、グループメンバー、講師と参加者の三者によって「共に作り上げる時間・空間」という考え方は、大切だと思われます。今後のことを見据えると、参加者がお互いに「講師」になれるように、それぞれの“得意技”を発掘するプログラム運営を目指していただきたいです。参加の形態が多重化すれば、活動はさらに豊かさを増し、参加者の意欲も高まってゆくことが期待できるでしょう。

< 3-6 遊びとまち研究会 >

- ・災害復興まちづくり部門での活動の成果が「復興おたすけゲーム」というかたちになり、とてもすばらしいと思います。今年度は世田谷での活動を基本として考えてください。各学校 PTA などでの研修、まちづくりセンターでの防災イベント、大学のゼミなど、試験的に活用していただく目標数として4回は可能な数字だと思います。(交通費や謝金ではなく) そのためのゲームセットの作成やワークショップ開催に予算を活用してください。
- ・災害対策・復興まちづくり部門の成果を受け、「復興お助けゲーム」が誕生し、今年度はそれをいかに活用していくのかという段階ということで、ゲームの参加者やファシリテーターを如何に増やしていくのが重要ですね。防災に関する取組をしている団体に知ってもらい、防

災関係の横のネットワークで広げていくことがひとつの手段になるかもしれませんが。できるだけ営業活動を展開し、たくさんのフィードバックをもらって、一層のゲームのブラッシュアップにつなげていただくことを期待しております。

- ・長く続いている活動であり、助成を行うことに疑問は無い。世田谷への還元という意味でも、十分意識されて取組まれていると思う。世田谷だけに留まらず、広く他地域にも学びになる取組みだと思う。継続展開に期待している。
- ・もともと助成を受けておられた「災害対策復興まちづくり部門」での活動を通じて被災地からいただいた教訓や知恵を、世田谷区内における取り組みに繋げ結びつけようとする、とても意欲的な取組みだと認識しています。市民ならではの発想や地域の人的ネットワークをベースとした、これまでにはない新しい防災まちづくり活動になりうるのではないかと期待を抱いています。ぜひファシリテーターの育成や、防災関係以外も含んだ地域情報の日常的共有のため、全区的な活動の普及をお願いします。

＜ 3 - 7 特定非営利活動法人 せたがや移動ケア ＞

- ・貴重な調査事業だと思います。調査ボランティア活動や協力者との関係が持続するような調査企画とすることで、その後のソリューション提案や事業化につながる、具体的な調査になることを期待します。
- ・高齢者や障がい者にとって移動手段がなく、外出が難しいケースが多い。そのような移動困難者の現況調査をすることで、外出移動に関わる行政や民間事業者のサービス向上を図る活動は意義がある。また、調査結果の公表は、区民への啓発にもなり、福祉活動の充実も期待できる。
- ・仲間を作りながら生活に困難を抱える方の移動支援をしており、確実に必要なサービスを届けていらっしゃると思う。調査ということで、必要な取組みを政策提言に繋げて頂きたい。

- ・ 昨年も記しましたが、交通弱者への移動支援サービスは、籠もりがちな方々を身体・精神的に元気にする可能性のある、時宜にも適ったもので、その基礎となる本活動が持つ意義は疑いようがありません。福祉系の研究に取り組んでいる学生さんなどとのよき出会いがあることを願っております。データの分析に際しては、日常的なサービス提供の場面で得られている「直感」や、それに基づき設定されるべき仮説が極めて大きな役割を担ってくると思われます。データ分析上の協力者との対話を重視しつつ、今後の移動支援サービスのあり方を展望できるような研究成果が生み出されることを大いに期待しております。